

## 第8章 水を活かした都市づくりへ向けて - その可能性と問題点 -

法政大学デザイン工学部教授 陣内秀信氏

ちょうどオイルショックのタイミングだった1973年の11月から、最初の2年間はベネチアに留学し、3年目からはローマだったが、その時に水の都市そのものを研究対象にした。当時は「歴史的な、非常におもしろい都市がある。どんな風に来て、どんな風に暮らしているのだろうか」という事を都市史の分野から調べようとした。当時あまりそういう研究はなく、帰ってきて法政大学で教えるようになって、東京の都市空間についても現在から過去へ遡るといような、ベネチアでやっていたような手法で取り組んだ。その課程で「水の都市、江戸・東京」というテーマもあるのではないかと思い、1980年代に入る頃から研究を始めた。その間に舟を使って、日本橋川、神田川、隅田川、東京湾と回ったが、あれよあれよという間に、ウォーターフロント・ブームが来て驚いたわけである。1985～6年頃の東京、あるいは日本の都市におけるウォーターフロントのブーム、開発というのは、やはりアメリカや一部のヨーロッパのモデルをできるだけ持ってこようという感じが強かった。一方では勿論、河川、内陸、内部の水路に対する市民の活動や行政の努力があったわけだが、いわゆるウォーターフロントというのは、ベイエリアが中心だった。

そうして時代が変わり、新しい都市が生まれつつあるという実感を持ったのだが、どうもやはり日本、あるいはアジアの水辺というものがもっとあっていいのではないかと考えた。中国の江南地方、蘇州の周辺には小さい水路の町がいっぱいあるのだが、今は大変な観光ブームになっている。我々が調査した1980年後半頃は非常に落ち着いた雰囲気があって、その町の魅力を感じた。水網都市という概念を、京都大学、大阪大学で活躍された上田篤先生がおっしゃっていて、日本の都市を見るのに重要だと思った。ヨーロッパの、あるいはアメリカのウォーターフロントになぞらえて、日本でもベイエリアが随分騒がれたわけだが、それらは近代の港が多く、湾に面し、海に開き、ピアが出ている。それに対し、東京や大阪、新潟、広島、福岡も一部そうだが、水網都市になっている。柳川ももちろんそうだが、アジアにはそういう所が多い。考えてみるとベネチアがそうだし、アムステルダムもそうである。そういう古い歴史をもつ水の町の魅力や可能性をもう一回描き出す必要があるのではないかという事を非常に感じた。

さらに南イタリアの古い中世、あるいは古代からの起源を持っているような港町が、最近この10年くらいで非常に蘇ってきているのだが、そういう町の持っている都市構造と港周辺の

海と町との関係、そういうものも日本の、例えば瀬戸内海の古い港町などを理解するのに非常に重要なのである。イタリアなど海外とも比較しながら、都市空間と川、掘割、運河や水辺と結びつけて理解する事をやってみようと考えたわけである。と言うのは、やはり近代は陸の時代であり、海の側、川の側から都市の歴史を見るというアプローチが、学問の世界ではあまりなかった。都市史というのはようやく1970年代から出てきたのだが、みんな陸から見ている。町並み保存というのも、文化庁や教育委員会で活発になったのだが、海の側から、川の側から町の価値を見るというのはなかなか無くて、例えば東北の最上川沿いにある大石田という所は、川沿いの景観に歴史的価値があるのだが、みんな陸の側から町並みを見ていた。今、<sup>ともうら</sup>鞆の浦の問題が非常に注目されてきているのだが、あれも街路沿いの町並み保存は熱心にやろうという事なのだが、港の方に関しては調査や価値評価が遅れた。ここは本当は日本が誇る中世、近世の港で最大の遺構を持っている所だが、他と比較する基準がないという事を文化庁の友人が言っていた時期があった。それで調査が遅れてしまったという事だが、これは世界中似たような状況である。こうして港町の再発見、川の側から都市を再評価するという事が遅くなり、1980年代になってようやく始まったという事だと思う。

そんな事をやっている間に、法政大学の中にエコ地域デザイン研究所というものを創り、5年前から世界と日本を比較しながら、水の都市というものを、特に東京を中心に考えていこうという事を文系の人も交えてやっている。そこで我々がこだわったのは、歴史とエコロジーという分野を合体させようという事だった。勿論歴史的に河川を見るという方も段々出てきたが、従来は世界的に見ても、水や自然あるいは河川についてはどちらかと言うと、市民運動も行政もエコロジー、つまり自然の方から専門的に取り組む人々と、歴史や文化財、都市史の方から取り組む人々とにどうしても分かれてしまっていた。でもそこは本来はそれを合体する必要があるだろうという事で、学際的にやろうと考えた。先ず都心、下町を専ら最初にやったわけだが、最近では近郊の日野とか国立の用水路、川、湧水、こういうものが作り出すルーラル・ランドスケープに非常に注目している。最近国内の食料自給率が低いという事もあって、農業をもっと見直したり、あるいは失業した人々が今度は農場で働くという話題もあるが、急速に農地も都市の周辺で重要であるという認識が出てきた。ヨーロッパでは既にもう1980年代からそういう方向に行っているわけだが、日本でもそこでの水環境、地域というのも重要だという事で今取り組んでいる。

話は変わるが、スペインのサラゴサでの水の万博には、皇太子殿下もいらっしゃった。そこでは水の都市のパビリオンが作られて、世界各地の代表的な水の都市の展示があったのだが、我々も東京の水の都市をビジュアルに示す事に知恵を絞った。欧米の都市には、公共的なインテリアでランドデザインを描きながら、臨海部やベイエリアを大規模に再生している事例がたくさんあり、ビルバオをはじめ、最近ではマルセイユ、ジェノバが元気だ。一方アジアでも韓国のチョンゲチョン（清溪川）、あるいはシンガポールのように市長や首相が言い出しっ

べになって、トップダウンの方法で見事に公共的な見地からランドデザインを描いて、再生している例がある。それに対して日本は、どうもそういう風に見ると、あまり世界にアピールできるものがないという所が弱点だと思うが、一方では市民や住民の方々の多様な活動がものすごくあって、それとリンクした行政の努力があちこちで実を結んでいる。この多様性、バイタリティというのは、本当に日本のお家芸であり、得意とするところではないかと思っている。水の空間の多様性と地形という自然条件が非常に豊かだという事と表裏一体だが、そういう各々の場所で非常に創意工夫をし、住民の思いをこめた活動がある。まずは大きい視野で言えば、5000年前の縄文海進の時代から始まって、関東圏の中で江戸や江戸の都市構造が出来上がっていくまでのプロセスが1つ。もう1つは近代になって水の都市が失われたという風に考えられがちだったと思うが、少なくとも昭和の初めまで、あるいは戦後もしばらくは水の空間が生きており、舟の数が増えたり、水上バスがたくさん走っていたりして、水の際に良い空間や建築がたくさんあった事である。そういう事をもう一回思い起こそうという事で、やっていたところ、江戸橋のたもとにある三菱倉庫の方と出会う、竣工当時の三菱倉庫の映像の記録を見せてもらった。ものすごく先端的なクレーンで、荷を吊り上げている様子が分かる。そういう感動的な昭和初期の光景も知る事ができた。

賑わいのある水辺というのは日本のかつての特徴だったが、最近の水辺での再開発は、これと反対の方を向いているという事も言える。資料1(P.187)の絵は、品川のエリアを扱って大学院生がワークショップで考えたプロジェクトだが、こんな風にあつたらいいなというイメージである。夢物語なのだが、思いが籠っている。都市や地域を知るという事が非常に重要であり、それを歴史のアプローチ、そしてエコロジーのアプローチでやっている。もうだいぶ前になるが、江戸東京博物館で「水の都市東京」の展覧会を行った。皇太子殿下もいらっしゃっていただいたのだが、東京はかつてエコシティだったという事をもう一回再認識する必要があるように思う。これは我々のエコ地域デザイン研究所として、この3年くらい取り組んでいる方向性の一つだが、巨大都市東京は、本来地形の変化に富んで豊かな水の生態系を誇る水の都市だったのであろうと、その姿をエコロジーとヒストリー、両方の立場からエコヒストリーとして解き明かそうというものである(資料2)。もう一つは利根川、荒川、多摩川という3つの大きな水系があり、また中小の河川がいろいろな池から湧いたりしているが、その源流から河口までを一体として見ていこうという風に捉えた。そういう見方というのは専門や対象が分断されており、やはり行政の中でもそうだと思う。そういう趣旨の展覧会、源流展をこれまた2年前に国土交通省や国土地理院の方をはじめ、いろいろな方々に参加していただいて科学博物館で行った。

例えば多様だという事を示すのに、永井荷風の『日和下駄』の冒頭を見れば、非常に端的に書いてあると思う。品川の運河、隅田川や多摩川のような大きな河川、神田川、音無川のような中小の河川、さらにもっと都市化している中に流れている日本橋や深川の掘割の他、中には

根津の藍染川や麻布の古川のように名前は美しいけれども今ではどぶ川みたいになってしまっているものもある。さらに下水化した水路、江戸城を取り巻く幾重の濠、不忍池、それから数多く存在した井戸、つまり湧水、地下水、それらの事にも目配りして、まさに大正時代に描いた東京は、江戸から受け継がれている水の空間をたっぷり持っており、それを彼は地勢やエコシステムと重ねて論じているというように現代から見ても評価できるのではないかと思う（資料3）。

やはり日本人の水辺への意識や深層心理、信仰心やそういう聖なる物へのこだわりなども含めて見る必要がまずあるだろう。どうしても開発という事になるとテクニカルに、マニュアルみたいになってしまうわけだが、もう少し根本に戻るところも並行してやる必要があるのではないか。例えば隅田川沿いには、たくさんのお寺や神社があるわけだが、中世や古代末に遡るものが多い。やがて江戸の早い段階で富岡八幡宮ができるが、他にも例えば木母寺という寺は江戸時代、非常に重要なお寺だったわけだが、水を渡る儀礼や禊えこういんといった意味合いがあり、そういう事例が各地で出てくる（資料4）。深川の富岡八幡宮や回向院もある意味そうかも知れない。浅草の浅草寺もそういうプロセスでできた。従ってまず信仰に結び付いて、そこがだんだん行楽地になったり、人を集めるエンターテインメントの空間になると、そのプロセスで人が歩いてくる結節点である橋のたもとに、両国のように都市的アクティビティが生まれた。中世だけではなく、江戸時代にも普段のコミュニティから離れた、こういう場に自由空間が生まれ、河原や橋のたもとで都市の発生に繋がる要素が出てきたという事は非常に重要だろうと思う。やはり水辺には基本的にいろいろなアクティビティが集まり、賑わいもあったという事であろう。

アラン・コルバンさんというフランスのアナール学派の大家がおり、以前彼が来日した時にセーヌ川と隅田川の比較という事で対談をさせてもらった。セーヌ川にみんな憧れるわけだが、日本には日本の良さがある。セーヌ川沿いは、16世紀、17世紀、18世紀、19世紀と時代の変遷とともに、だんだん大きな立派な建物を建てていって公共建築が並んでいる。今もライトアップして素晴らしいのだが、庶民的な賑わいはない。一方で例えば隅田川には宗教空間がいっぱいある。遊郭、あるいは料亭のような花街があり、人の集まる行楽地があり、自由空間があった。コミュニティの外に外れているという事があって、そういう色っぽさとか、いかがわしさとか、あらゆる民衆の情念が隅田川にはあるわけである。そういう違いというのはやはり大切にすべきではないかという事で、空間人類学という言葉も使ってきた。

資料5のこの光景は、お台場海浜公園で毎年6月に行われる海中渡御なのだが、荏原神社という品川の中世起源の古い神社から水上パレードをして、17艘ぐらい舟が行き、ここにみんな並んでお神輿が2艘目に乗っかってくる。それを降ろして水中で乗る。小一時間、本当に感動的な光景が見られる。場所を移しながら現在はここに落ち着いているのだが、フジテレビの本社という現代建築の前でこういう光景を目にするのは、なかなか日本にしかないものであ

り、これは本物の伝統と現代との繋がりだと思う。歴史的に水に関係した空間がどのように使われてきたかを見るという事は非常に重要であり、これは現代の我々の時代の都市、あるいはライフスタイルと結び付けて今度はどういうものを創り出したらいいのか、どういうものを再生したらいいのかという事を考える上での重要な手がかりになると思う（資料6）。これだけのさまざまな要素が、水と絡んで展開したという事は、アジアをずっと探っていってもなかなかないのではないかと思う。

ヨーロッパではギリシア、ローマ時代は水の神様がいて、港の神様を祀った神殿があったり、水に聖なる雰囲気を感じるという事はあったが、中世のある段階でキリスト教が非常に強くなってきてからはそういう事が失われていった。一方日本はずっと水辺に霊的なものを感じたり、あるいは楽しむという事を繰り返してきた。そのためにはまずは水害から守る、すなわちそういう技術やセンスをベースにして、治水に力を注ぎながら水と密接に結びついて生活してきた。

それから忘れがちなのは漁業、漁師町である。例えば東京では各地に元漁師町のコミュニティがあるが、代表的なものとしては佃島があり、ここに江戸の初めに家康が摂津、関西から連れてきた先端、先進的な技術を持った漁師のグループが特権を与えられてコミュニティを作った。そのスピリットと、町並みの仕組みが、住宅のあり方となっていてずっと継続している。従ってここは非常にコミュニティのつながりが強いので、バブルの時期に地上げ屋が徘徊しても撃退したわけである。町会長で氏子総代に当たる人物がリーダーシップを取って、本当に上手に町を守った。ここは非常にすごい漁師町である。そうやって眠っている都市の記憶、場所の特徴、文化史、そういうものをもう一度描きながら現代の多様な機能、意味をそれぞれの地域に与えていく事が重要だと思う。

1つの例として深川はまずは漁師町からスタートし、その鎮守の社である富岡八幡宮が江戸の早い段階にできて、その周りに花街ができた。そして木場がここへ引っ越してきた。元々背後は海だったのだが、ここを埋め立て、造成して木場ができた。それから近代にはこの辺りの佐賀町で流通が発達し、舟運を使った、全て水と結びついた産業経済や文化が発展した（資料7）。旦那衆がいたりして、深川はやはり昭和の初期まで水の都市だったという事が言える。それをどう生かして地域を創るかという事が、非常に重要だろうと思う。ところがどうしても不動産の論理で、マンション街になってしまう。やはりもう少しプロダクティブな、あるいは文化的な都市の機能というものを、是非深川は持ってほしいと思う。

もっと華やかな文化としては、初期の京橋・銀座の少し海側の方にある埋め立て地に1650年前後に展開していた芝居小屋や茶屋、風呂屋の光景が、やや誇張もあるわけだが、江戸図屏風の中にイメージ豊かに描かれている（資料8）。こういうものはやはり原風景としては大変興味がある。その後、木挽町に、掘割に接して芝居町が作られた。こういう水辺にできた芝居町そのままの形を継承しているのが、大阪の道頓堀だ。阪神が優勝するとみんな飛び込む。

あそこは実は芝居町とそっくりの構造で、劇場街が今もある。劇場、カニがバタバタしている料亭などいろいろあるが、あれは全部芝居茶屋だった所である。そして最近はプロムナードをつけたりして、大阪は水際を再生している。

東京にもこれと同じようなものがあったのだが、早々と失われてしまった。ただ屋形船が1970年代に復活してきたり、もう一度水に親しむという事が多少出てきた。近代に入ってから実にも精力的に水の都市を生かして造ってきたという事を思い起こす必要がある。資料9の写真は有名な財界の立役者、渋沢栄一の自邸だが、近くに江戸橋、日本橋があって、大名屋敷の跡なのだが、兜町が世に出ていくきっかけにもなった。ベネチア・ゴシック風の家だが、辰野金吾が設計している。コンドルというイギリス人の建築家が工部大学校（現在の東京大学工学部）で建築家を育てたわけだが、第一期生の中の一人が辰野金吾（東京駅設計者）であった。彼は工部大学校を出た後、ロンドンに留学するのだが、その中で最後の方にヨーロッパを旅行し、ベネチアにも20日間くらい滞在したらしい。その間にベネチアの建築にも触れたようだ。コンドルも最初の二つの作品は、ベネチア風、イスラム風で作っていて、弟子の辰野もその薫陶を受けている。一方渋沢栄一も、東京をベニスのような国際交易都市にしたいと願って、こういう風なものを造らせた。近代にも資料10の写真が示すように、水辺にいい空間、すなわちプロムナード、橋、近代建築がいっぱいできており、例えば銀座界隈であれば、日劇や朝日新聞社、泰明小学校等、これだけ立派な近代の水辺空間というのはなかなか外国にもないのではないかと思う。残念ながらこの水辺空間は東京オリンピックと共になくなった。現在残るのは泰明小学校のみだ。

今東京オリンピックがまた話題になっているが、同じような夢は1940年の万博をベイエリアでやろうというプロジェクトにあった。この頃海への関心が出てきており、だんだん内部の日本橋川から深川に、そして月島に、ベイエリアにという風に日本人の近代の夢、つまり水の都市を造りたいという願いがだんだん広がっていったというプロセスが感じられる。実は1940年に日本建国2600年を記念して、オリンピックと万博を開催する事が決まっていたわけだが、残念ながら日中戦争に突入という事でできなくなって幻に終わった。その会場がおもしろい（資料11）。月島、築地、晴海、豊洲といったエリアだが、この辺りに臨海副都心ができる事になっていた。この埋め立ての構想はかなり早くから進んでいる。舟も利用し、水とうまくマッチングしたような、かなりモニュメンタルな配置なのだが、非常に夢を追いかけたプロジェクトで、実は東京市役所をこちらへ引越しをさせようという計画もあって、それは反対があって頓挫したのだが、勝鬃橋が唯一残った。その意味ではちゃんと実現したものもあったという事になる。こういうプランがあったという事は、今回もう一回東京オリンピックを水辺で展開しようという時に非常にいろいろな意味で参考になるだろうと思う。

しかしながら逆に川をその多様な価値を考えないで下水にしまったり、暗渠化してしまったり、あるいは高速道路をそういったものの上にも架けたり、当時としてはやむを得なかつ

たのかも知れないが、そういう残念な時代もあった。しかしこれは、多くの国民、都民に歓迎されたわけなので、やはり時代の価値観だったと思う。それでも我々はあきらめずに、1980年代に入った頃からこういう作業をずっと飽きもせずやってきたのだが、最近はEボートという10人乗りの手漕ぎボートを大学でも買って、これで東京の都心を回るといふ事をしている。これは水が感じられて本当に楽しいし、ワークショップとしては最高である（資料12）。

ここからは外国の都市と比較して感じる事を申し上げたい。資料13の左の写真はスペインのビルバオであり、右は韓国のチョンゲチョン（清溪川）の図である。どうしてもやはり外国と比較すると、日本はグランドデザインがなかなか描けないというか、マスタープランが苦手というか、それを作る意志がなかなか感じられない。他のアジアの国の場合はトップダウン形式だが、これは日本ももっと注目すべきではないかと思う。ただ一方では専門家が精一杯頑張っていて、いわゆる住民運動や市民運動はないかも知れないが、専門家と行政のトップがリンクして、本当に素晴らしい成果を短期間に上げるという、そういう構えはできているのではないかと思う。いずれにしても公共的な見地からグランドデザインを描いてやるという事はアジア独特のやり方である。一方欧米は自治体がヘゲモニーを持って、あるいは国もサポートして、財界、民間と一緒にあって、グランドデザインを描いた公共事業、再生事業をやっている。

日本の場合は、多様な市民、住民の活動とリンクして、あるいはそれに後押しされて行政側が行うという、そういった動きがかなり多様にあるわけだが、大きなグランドデザインというのはなかなか描きにくい。しかしそのように個性付けられるローカルな動きを、連動させていく必要があるだろうという風に思っている。ところがベイエリアは住民がいないので、日本流のやり方ができない。ここではやはり、結果的にはデベロッパー任せの感が強い。ここが一番決定的に、欧米、アジアとの違いになっているのではないかと思う。

従って川の問題、あるいは水辺の問題でもエリア毎に課題の問題点を抽出しながら、それぞれに対応していく必要が当然あるだろう。もう一つヨーロッパと比べて感じるのは、例えばドイツもイタリアもオランダもスペインも、経済vs環境という対立軸で捉えるのではなくて、環境を大切にしながら経済を活性化させる、あるいは文化はもっとそうだが、文化的なものを育てる事によって経済が新しい形で展開するという、こういう形になってきている。工業化都市が終わり、金融、ITという時代が日本は長く続いて、東京をグローバル・シティ、金融都市にしようという事で非常にバブルにもなったが、もう少し足腰を強くして、クリエイティブ・シティ、つまり文化創造都市を目指すべきではないか。これは横浜がかなり主張していて、金沢も続いたりしているが、ヨーロッパはこの方向をかなり目指している。毎年文化都市というものを命名して、それによってアクションを起こし、本当に元気な都市が歴史を生かしながらできていくという、そういう段階にどうやって移行して行くかという事は大きいテーマだろうと思う。その時に水辺というのは最大の魅力ある舞台、場になると思う。

イギリスの産業革命で活躍し、その後近代、1950年代、1960年代と衰退していた都市が最

近すごく蘇ってきているという話を聞く。即ちそれらの都市は水辺を生かしているという。そこにはコンベンション、文化観光なども当然入ってくる。風景、ランドスケープというものが非常に価値があるといって、人を惹き付ける、リピーターを呼ぶ、そこに文化的な活動の場が作り易ければクリエイターも集まり易いという事である。歴史的な所を海外の事例で言うと、資料14はアムステルダムであり、有名なのでご存知の方も多いと思うが、大体江戸と同じくらいに大きく発展した。東インド会社の発展により港ができ、さらに近代になってから駅ができて、鉄道が入ってきて水辺と古い町とが分断されてしまう。しかしその後埋め立て地を作るなどして、あちらこちらに工業ゾーン、住宅ゾーンができた。日本とよく似ていて、埋め立てが活発だった。しかしこれが1960年代には操業を終えるわけで、それ以降ボルネオやアイブルグといった非常に魅力的な街づくりをやっていって、世界のモデルという風に言われている。

アムステルダムでも非常におもしろいのは、フェリーがものすごく活発に動いていて、駅の背後からフェリーがいっぱい出ている。大型船が通るので橋を架けにくいという事と、やはり風景的にも橋をたくさん架けるのを避けていると向こうの都市計画のリーダーが言っていた。そこでトンネルを作り、そしてフェリーをたくさん走らせる。その水陸交通の結節点は、今は貧相なものだが、いずれはマリン・ターミナルを造ろうというプロジェクトである。本当に手際よく、何本も何本もしょっちゅうフェリーが航行しているので、これは東京でもできるのではないかと、やらなければいけないのではないかと非常に感じている。

大型の船で週末ライン川を上って行く、非常にゆったりとした船での観光というものも活発のようである。前は工業ゾーンだった所がこのように見事なハウジングを中心とした町に変わっていったら、コンペが行われ、ランドスケープ・アーキテクトが選ばれて、そのアイデアの下に、個々の建物を別々の建築家が思いを込めて設計しているような所もある。中層のものもあれば、低層のものもあり、足元にはポートがつけられている。もちろんこれは二重の閘門があって、守られているのであるが、東京だって本当はできなくはない事だと思う。閘門の外は、水位の差がかなりあると思うのだが、ここはかなりしっかりと埋め立て地を作り、現在都市開発を進めている(資料15)。部分的に守られているのだと思うが、内部に親水性の高い中層、低層のハウジングをやっており、非常に人気がある。民間の活力が大いに活用され、デベロッパーもたくさん入っているが、これはランドデザインを描いて、公的な見地から方向性を出し、官と民が一体となってやっているという事である。

また、マルセイユも最近非常に頑張っている(資料16)。古い港があり、この古い町もプレジャーボートの基地があったりして非常に賑やかで、しかも漁師さんが朝魚を売っていたりして、新旧のものが混ざった、非常におもしろい観光地である。一方で近代の工業ゾーン、港湾ゾーンは、活力ある時は町を育てたわけだが、今や衰退して非常に問題の多い地域になっている。これを蘇らせる大きいプロジェクトを、国もサポートしていると思うが、むしろベンチャ

ービジネスの会社が創つたらしい。まずは2006年の秋にワークショップがあって、コンペが行われた。その審査委員と呼ばれて行ったのだが、非常におもしろかったのは、旧市街から展開していった19世紀後半、20世紀初めのエリアの中で、大きな倉庫が蘇ってきて、いわゆるクリエイティブ・インダストリー、クリエイティブ・シティの代表的な使い方になっていた点である。日本でも川崎や北九州市等はいち早く次の段階へという試みをしたのだが、必ずしも成功している事例が日本にはそうはないような気がする。ヨーロッパやアメリカは、こういうところが今一番大きな都市づくり上の課題になっていて、コンペをやったわけである。専門家が世界中から、特にフランス圏から集まって20日間くらい缶詰め状態で、いろいろなチームを作り、建築家、プランナー、社会学者、経済学者など年齢もさまざまな人たちがアイデアを発表し、クリティークが行われた。これらは市民にも公開されている。いいアイデアを全部総合して次へ繋げようという、町を挙げた取り組みであり、市民の意識も高く、公共側と財界も一緒になって、専門家も知恵を出すというオープンな感じでベイエリアの開発が行われているという事は、非常に羨ましく思う。

スペインのビルバオもやはり同じようにベンチャー的と言うべきか、国と州と市がお金を出し、鉄道、国鉄も土地を無償で提供し、企業が多く参加して作られた公社のような企業体が中心になって2000年頃からやっている。川がずっと流れ込んでいって大西洋に注ぐ、古い中世の町一帯に19世紀後半から20世紀初めにかけて、工業地帯ができたが、ここを再生するわけである。工業都市として栄えた頃にできた19世紀の町並みだが、見事に残っており、今や保存の対象になっている。かつて製鉄や鉄鋼といった重工業が栄え、船がどんどん入ってきた所を作り変える。コミュニケイト、トランスフォーム、ファシリタリーなどのキーワード、目標を掲げて、環境、水を取り戻す。そして分断されていた所を地下鉄や路面電車といった新しい都市交通システムで結び、それから大きく作り変える。そして人々にとって使いやすい町にする。グリーンを入れて、上にトラムが走れば、環境にやさしく、人々も水際に集まりやすい一方で(資料17)、歴史の記憶として、ドッグも残している(資料18)。「横浜でもこういうクレーンを残せばよかったのに」という話も聞いた事があるが、もっともっと大々的に残してもらいたいと思う。

また日本に話が戻るが、公共的な大きなグランドビジョンを描くものについては、これからもう少しやはり考えていく必要があるだろう。とりわけ臨海においてはそうである。もう一方で、日本は「街づくり」という、英語に訳せない非常におもしろい概念を発達させてきた。あえて訳せばコミュニティ・ベースト・タウンプランニングと言うそうだが、これは本当に日本のお家芸である。ソフトや住民の感覚も入れつつ、もう一步踏み込んで、「街づかい」という風な言葉を使おうと提唱している人たちも出てきているわけである。これはなかなか良い言葉である。全国の事例も集め、やはり管理・規制でがんじがらめの水辺を創造性豊かに使う試み、社会実験が必要だとつくづく思う。資料19はお台場公園の夜だが、非常にいい感じになって

きている。ここも非常に稼働率が高く、多彩に利用されている。さっきのお神輿もそうである。ワークショップを我々はよくやるのだが、先ほどお話ししたEポートが大活躍する(資料20)。この外濠の管理というのは微妙な面があるが、今史跡の調査が行われ、さらにここをうまく活用し景観を誘導していこうというような動きがようやく出ている。資料21のカナルカフェは、後藤新平さんの肝いりで、大正7年にオープンした東京水上倶楽部という大変由緒のある施設であり、当時はここを本当に公園として、豊かな水辺を育てていこうという気運があったようだ。もう一度原点に立ち戻って、合流式の下水ゆえに水が汚れてしまうこの水循環をどうするのかという大きい問題や、水の供給が足りないという問題をどうするかという事を考えていく必要があるだろうと思う。元々は玉川上水の水が一部入っていたわけだが、そういう水循環や水浄化の事も考えながら風景も考えるという、そういうワークショップをやっている。実際に水上ジャズコンサートを去年、おとしと立て続けに行ったりして、もっともっこのように風に水辺を利用する、活用する、体験するという事をやっていきたい。

一方で、だんだん郊外の方にも目を向けていくと、東京の住民の多くはやはり山手線の外側に住んでいるわけなので、そこにやはり水辺を生かした、あるいは歴史、エコロジーをもう一回見直すようなムーブメント、文化運動が必要ではないかなと思っている。郊外に住んでいる人たちの中には、多少の緑を求めて何の歴史の特徴もない、文化的アイデンティティもないところに便利だから住んでいる、という人もいると思うが、もっともっこのように歴史とエコロジーから意味を見出していきたい。成熟社会になればますますそうであり、私自身も杉並で育ったのだが、中央線が入ってくる前は鎌倉古道ともいわれる中世の古道が通っていて、そこがぶつかるところに阿佐ヶ谷駅ができ、パールセンターという商店街ができた。お地藏さんもあって、豊かな田園が広がっていた。そういう所には必ず湧水があって、それを結んで古道があり、神社ができると、古墳やお寺や神社もできるというように、地域の地形に結びついた聖と俗、あるいは農業など、そういうもの全部が結びついた意味のあるトポグラフィ(地勢)があるわけである。

そういうものをもう一回探っていくというような事も、江戸の町だった所はみんなやり始めたわけだが、それをむしろ外側でやるべきではないかなという風に思う。例えば善福寺川であれば、これを軸として、古道沿い、南北の道に沿って湧水があり、遺跡があり、神社がある。近世になると中心から放射状に街道が延びて、街道沿いに集落あるいは宿場町ができ、新田開発が行われる。そして近代になってようやく鉄道が入ってくる。今は鉄道や駅前商店街ばかり皆注目して、そこが地域のセンターだと思うわけだが、本当はこれら全部を総合させた地域の評価、おもしろさ、地域づくりが必要だろうという風に思う。

大宮八幡という鎌倉時代にできた杉並で一番重要な神社があるが(資料22)、これは善福寺川沿いのちょっと高い所にある。今も水が湧いており、人々が水を汲みに来ている。こういう大地の力、これは私の原風景なのだが、高台から降りていくと、水田が広がり、レンゲソウが

きれいに咲いていた。やがて高等学校ができたり、阿佐ヶ谷団地ができたりして、だんだん武蔵野の面影が薄くなっていくのだが、確実にこういう川の軸が近代にまた整備されて、地域の軸として蘇り、まさに水と緑の廻廊がコミュニティの空間としての意味をもう一度持つてくるという時代になっていると思う。

ミツカン水の文化センターという所でずっと社会学者や人類学者の方たちと一緒に仕事をしてきた中で、「里川」という概念を3年位前から提唱している（資料23）。やはり日本の大きな特徴は、水に愛情を込めこだわりを持っている、あるいはライフスタイルが水と非常に結びついている点だと思う。これは都心でも下町でも郊外でも田園でもみんな同じではないか。ところが近代システムになってから、そうした水が遮断されて、生活から切り離されてしまった。結局、防災や治水という事と結びついて国あるいは行政側が管理するようになってからは、もう一回水を使うという事をしなくなってしまった。すなわちもう一度新しい意味を与えて住民が親しみ、使いこなし、維持管理するような川、いわゆる「里山」に対して「里川」を取り戻そうという事を提唱している。このような対象は考えればどこにでもあるはずで、善福寺川もそうだし、隅田川もそうだし、神田川もそうだし、そういう「里川」という、日本独特の考え方を育てよう、という事を提案している。

我々は日野市とお付き合いが深まっているが、日野市は東京の中心から30キロ西にあり、ここは本当にまだ田園がいっぱいある。地政学的にも、エコロジカルに見ても非常に豊かな所である。台地があり、丘陵地があり、多摩川、浅川があり、1580年代から川から用水を引っ張って、農業用水が網目のように巡らされており、沖積平野にも人が住み、農耕ができるようになって、近世の美しい豊かな農村風景が大きく広がった所である。従来は用水路、水辺ばかり注目されたが、条例もできて、先進的な自治体と市民運動によりマスタープランの中にも水を生かすという事が盛り込まれた。しかし街づくりに結びつけるところがやはりうまくいかないという事で、だいぶ問題がいっぱい出てきてしまって、勢いが無い。同時に農業が衰退しているので、用水路が不要になっている、それで区画整理を持ち込んで、宅地に変えていって用水路が失われるという、非常に難しい局面を迎えている。

それに対して我々は、もう一回水路を中心として、ルーラル・ランドスケープ全体、すなわち地形、山、湧水、川、用水、古道、街道、寺社、集落、遺跡、農地を評価するという事をやり始めた。例えば遺跡をみると（資料24）縄文、弥生時代は、水の湧く所に人が住んだ。中世にはその上に神社、お寺ができ、近世にはだんだん川から水を引っ張るようになる。元々丘陵のエッジで湧水が使えて、単純な用水路ができたのだが、それがさらに本格的に川から水を引っ張る用水路を巡らすようになり、そういう場所に集落が広がっていく（資料25）。古代遺跡が小高い所にあって、中世の遺跡ができて、近世の集落が下の方に出てくる。用水路も引かれる（資料26）。湧き水のある所に神社が祀られ、戦後になってここに図書館ができる。こうして意味のある文化空間がそこに寄り添うようになってきた。このような事が各地にあるわ

けだが、皆一様に開発してしまう中で、水の持っていた価値、精神性、風景が失われていってしまった。

しかしながら余裕のある今の時代になって、農のある風景をもう一度大切に、あるいは食料自給率を高めるという事も含めて、環境上も非常に農地は重要である。ただ担う人をどう育てるかという事が大問題だが、それはヨーロッパも主役が交代しながら、あるいは経営形態を変えながら変革して、農地を守り育て生産性の高い空間を作っている。資料<sup>27</sup>は川辺堀之内地区という所だが、ここから水を引っ張っている。集落の中にも掘割が流れ、神社ができてご神木があって、お寺ができてお墓があって、コミュニティの象徴となっている。私も実は、ベネチアとかイタリアの都市史をやっている中で水との出会いがあり、江戸、東京についても都心からスタートしたので、自然河川というのは自分の専門では全くなかった。その中で少しずつ勉強させてもらって、同時に今度は阿佐ヶ谷、杉並でやった事をさらに発展させて、武蔵野が残り、これだけ豊かな環境が受け継がれ、キープされている西側にももっと純粋に目を向けようという気持ちがかんたん強くなってきた。法政大学の我々のキャンパスが東小金井や八王子にあるのだが、お付き合いのある小金井市、国立市、国分寺市、そして日野市も同じような問題を抱えている。もちろん環境や水環境という事で熱心にやってきた所もあるが、やはりもっと大きいビジョンで考えるという事、つまりそこに歴史やルーラル・ランドスケープ全部を絡めるという風にやる必要がある。

あとは農業、農地をどうやって現代的に生かして地域づくりができるかという事だが、都市づくりというよりは、ここでは地域づくりという風に当面言うべきであろうと思っている。本当に良い農村風景があちこちにある。用水路が折れ曲がる所にはしばしば大木があったり、祠があったりして、皆こうした辻に意味を持たせている。高台のエッジの井戸の掘れる所に、母屋や離れ、付属屋があって、前面に畑や水田が広がっている。だんだん分家等によってこういう所を宅地化していってしまうのだが、こんなに水田があり、川があるという、こういう風景を何とかしなければいけないのではないかと、例えば小学校の環境教育に思いきり水田を使うようにすれば、予算も付くではないかと、そういう事をおっしゃっている先生もいる。この間も税制の問題を中心に農業をどうやって守るかというシンポジウムが日野であり、国会議員の方々も超党派で少しずつやっているという話をお聞きした。日野市ではシンポジウムや行政の方々、市民の方々と一緒に活動を3年位やっているのだが、そうしたお話を聞きつけて、国立の方々もシンポジウムをやってみないかという事で依頼があったりして、そうした輪は広がってきている。皆で視察したり、調査したり、卒論で学生が取り組んだりしながら、国立を少しずつ勉強している。国立も大変おもしろい所で、ご存知の方も多いと思うが、ここは中央線の国立駅南側に、昭和初期に理想都市みたいにできた学園都市である。複線の南北道路があって、並木道で、途中に一橋学園があって、斜めの道が左右対称にできていて、その一つは富士山を向いている。ところがマンション論争があったりして、そこだけが有名になったが、もっ

と南へずっと行くと実は古い原風景が眠っており、ここは地元の方々が非常に愛着を持っている。平安時代に遡る、谷保天満宮が小さい崖線のエッジにできているが、ここに水が湧く（資料28）。ここには中世の城山があって、これも丘のエッジの森である。鎌倉時代のお寺もあるが、これも水が湧く斜面だ。この辺りはこういう風景をたくさん残して、用水路も見事に季節によって水量とか水質が変わるらしいのだが、我々が行った時には本当に水がふんだんにあり、非常に美しい田園風景だった。ところが区画整理の問題で悩んでいるわけである。農地を持って農業をやっている方々はやはり相続の時に税金も高く非常に問題であり、農業も経営をするのは大変であると言っておられる。日本の政策では農業は本当にいじめられてきた。こうして区画整理が行われ宅地化すると、水路が失われたりしてしまうが、これもある意味、変化に富んだ、自然風景というよりは人間の手が入り、美意識の込められたルーラル・ランドスケープだと思う。こういうものは、カルチュラル・ランドスケープと最近言い始めているが、文化的景観の一種であり、日本では第一号は近江八幡だ。最近四万十川沿いがカルチュラル・ランドスケープに選ばれたようだが、純粹の自然だけでもない、建造物や町並みだけではない、いわばその中間で自然と人間の鋭意が一体となっているような、そういう場所を大切にしていける事は、ユネスコの世界遺産でも非常に重要なジャンルになっている。

こうした所は東京近郊にたくさん残っており、先程申し上げた、湧水の所にできている谷保天満宮にも本当に素晴らしい空間が残っている。高速道路が近くを通ったり、工場が進出したたりして、相当周りから攻められているのだが、ここは奇跡的によく残っている。ところがこういう所にも区画整理が行われようとしていて、用水路の上に蓋をしてしまうという計画になっている。つまりこんなに素晴らしい水の空間があるのに、社会的認識がまだまだこういう問題に対して足りないという事である。

国交省の河川景観マニュアル作りという委員会が2年程前にあって、私はこういう経験を踏まえて、日本は用水路が非常に重要であり、大きい河川だけではなく、用水路のネットワークにも目配りしなければいけないのではないかという事を申し上げた。こうした問題は各地にあり、今危機に瀕している。やはり面で地域を考える事が必要であり、農業というものをそのままキープするのは難しいが、新しい血を入れて、経営センスを入れてやっていく事が必要である。これは実はイタリアのトスカーナ地方などでもどんどん起こっている事であり、サンプルは多い。似たような言い方はいろいろ今までされているのだが、結局のところ私たちがこういう事を提案したいという風に考えているイメージは、「歴史・エコ廻廊」である（資料29）。

私たちは、歴史とエコを重ねる事で浮かび上がってくる地域の資産、受け継がれている環境の豊かさ、そういうものを提案している。私たちの大学の都市環境デザイン工学科にも、元々ニュータウン作りなどをやり、近代の区画整理なども推進してきた都市計画の専門の先生がいたりして、今はそれを反省し、こういう活動を非常にリーダーシップを取ってやってくれている。いわば新しいインフラストラクチャーにしようという事である。右肩上がりの成長拡大か

ら、人口減少・縮小の時代に転じた今、都市、地域の中に「歴史・エコ廻廊」の形成を提案し、自然環境と共生する21世紀型の都市・地域づくりを目指す必要性が高まっている。本当に水辺には集積した歴史・自然の遺産が集積している。これは都市部でも田園部でもそうである。それを生かした質の高い都市・地域づくりは人を惹きつける。エコツーリズムなどの観光も含んだ環境、文化産業、クリエイティブ・シティづくりには格好の場である。農業も新しい形で含めていく必要があると思う。

ヨーロッパの場合、バイエリアの工業ゾーン、あるいは港湾ゾーンが文化的に新しい価値を生むゾーンに変わり、観光にもなる。もう一方で田園部を大切にしながら農業も新しい形で育て、そこをエコツーリズム、アグリツーリズムの拠点にし、それを風景という概念でも非常に大切にするという、地域づくり、都市づくりがかなりメジャーになってきている。そう考えると、この東京だけではなく、全国にある大都市の周辺を良い形で再生するという事は非常に重要なテーマであり、それを水をキーワードにして行っていくという事は意味があるのではないかと考えている。それは新しい経済力の強化にも繋がるはずであり、そういう方向でどうやって考えられるかが非常に重要だと思う。そうすれば経済を環境の対立項と考える、あるいは文化を経済の対立項と考えるといった事を乗り越えて、21世紀の経済発展モデルになるはずである。

1960年代、所得倍増計画というのがあったが、「ゆとりと個性倍増計画」という事を今考えるべきではないかと思う。文化的景観というのが心のゆとりで、それは文化だけではなく、経済にも繋がる。具体的には都心バイエリアの水辺再生を、やはり「歴史とエコの廻廊」で担っていく。多摩地区や武蔵野地区においても同様に繋いでいく必要がある。こうした事はいろいろな方々がおっしゃっているので、そういう知恵を総結集してランドデザインを描く必要があるのではないかと思う(資料30, 31, 32)。

都心では私たちは外濠に拘ってやっているが、今皇居の内濠でもいろいろなアクションがある。丸の内では景観問題が出ているが、やはり景観だけではなくて、この内濠の水や聖なる森、そういう全体のエコネットワーク、歴史のネットワークと絡めて皇居の周辺の景観や丸の内の景観も考えるという風になると、もっと広い市民的関心が高まるのではないかと思っている。この間のシンポジウムでもそう述べたら、皆さん割合納得してくれた。神田川、日本橋川、隅田川、亀島川、こういった川を繋いでいく。幸い、文化庁の提案で、千代田区、新宿区、港区の教育委員会が一体となって委員会を構成して、史跡としての外濠の価値を多様に検討し、報告書をまとめた。石垣もたくさんある、見附もある、自然の景観もたくさんあるという事で、これをこれからの街づくりにどう生かすかというある程度のビジョンがその報告書には謳われている。今は街づくりの舞台を引き継いで、今後どうやっていくかという事に発展している。

品川のマスタープランの中では非常にやはり技能的なもの、例えば交通計画等いろいろな事を論じた。風が通るようにビルを配置するというような非常に注目される提案もあったが、実

効性があるのかどうかは分からない。もう一つ私が主張したのは、運河を環境と歴史の近代資産として受け継いで、今ある数多くの倉庫を生かすという事であり、水上交通についてももっともっと考えて欲しいと言ったのだが、どうもあまり受け入れられなかった。ただこの辺りは本当に資源が多い。一つ一つのエリアで、工場跡地などに高層マンションが建てられているが、全体をつなぐ論理があまりなく、舟運もここでは全然検討されていない。水上タクシーを本気で東京に導入したらおもしろいと思うが、実は横浜トリエンナーレの期間中運行していた。大阪はいち早くやっているし、広島もこれを行っている。東京でなぜ水上タクシーができないのか、本当に不思議ではないのだが、イニシアチブもないし、行政側もなかなか認められないという事だと思う。もったいない話だと思う。

水辺に立地しているホテルが多いわけであり、あえて意図的にコンベンションセンターを作るべきだったと随分申し上げたのだが、やはりマスタープランの中核の方々は、今ある陸側のホテル群を活かす事にこだわりがあるようである。本当は東京にそういう情報文化発信基地を作れば、東京にとっても、世界に対する売りになるのではないかと考えているのであるが・・・。こんなに恵まれた、自然、歴史に囲まれた資産はないのではないかと。

もう一方で可能性が出てきたのが、江東の掘割である。実は今度このエリアの押上に東京スカイツリーができる。600メートル以上の高さを誇り、ここから見た風景というのはまさに江戸の鳥瞰図と同じアングルである。21世紀の私たちがここから、江戸を前身として持つ東京を見ると、首都圏が見え、隅田川からベイエリアまで全部見える。環境を考え、水の都市をもう一回考える、そういう絶好のチャンスが来ており、ここには「環境ふれあい館」というものができる予定である。私も参加して今その案を練っているところなのだが、一つは舟運を復活させて、回れるようにしたい。それからビオトープや環境の問題を取り上げるのに、おもしろい場所もたくさんあるので、エコミュージアムみたいにしようとして計画している。下町には職人さんをはじめ、先端技術や伝統工芸がたくさんある。それから花街もあれば、江戸東京博物館もある、国際館もできる、浅草も近いというわけで、江戸川区、墨田区、台東区が一緒になって、エコツーリズムを発展させられるのではないかと。そのネットワークとして、水運が使えるのではないかと考えている。

実際に素晴らしい水辺が蘇ってきている。従来、産業都市の基盤形成を目指してきたハードなインフラストラクチャーに代わって、生活の質を高める水・緑の「歴史・エコ廻廊」を新しい時代の都市、地域のソフトなインフラと考える事を提案したい。その内容を具体化するための財政的、制度的な検討、実現の仕組み、プロセスの研究等は大変な課題なのであるが、さまざまな分野でこういった事を考えている方々は多い。

みんなで知恵を出し合って良い方向を目指して行きたいと考えている。